

訓点資料に於ける節博士に就いて — 節博士の発生と発達 —

沼本 克明

一、序

声明を始めとして、その他声歌・朗詠・神楽・平曲・謡曲で、アクセントや旋律の表示に使用される「節博士」(墨譜(はかせ))がどの様にして発生し、発達して来たかに就いては、専ら「声明研究」の立場から研究されて来たと言え、アクセント記号として取り扱う日本語研究の立場からは、節博士自体に就いての研究はほとんど行われていないと言えようである。

扱、その声明研究の立場からの節博士の歴史的研究の現状に就いてはどの様な実情であろうか。

昭和四十七年に発表された片岡義道氏の論文では「言わば学問以前の様相を呈している声明譜の歴史について、その現状を具体的に述べることはとうてい不可能である。」(「声明譜の二系統について」『仏教音楽 東洋音楽選書「六」』所収)とされ、そしてその十五年後の今日に於ても「博士」自体の研究水準については「声明の研究において、声明譜の記譜体系の解明の重要性については改めて云うまでもない。しかしながら現時点において云えば、不明な点があまりに多いばかりでなく、基本的な博士の名称や用語についても混

乱がみられるのである。その原因は現在の演奏伝承を中心とする個別研究が先行し、その基礎となるべき声明全体に関する基礎研究が十分に行われているとは云い難いことにある。即ち文献資料についてみても、調査、収集、整理、更に資料批判等が、組織的、計画的に行われていないのが現状である。従って記譜体系に関する諸説や伝承等においても、明確に立証可能なものは多いとは云えない。(以下省略)」（福島和夫氏『金沢文庫資料全書第八巻歌謡・声明篇続』(昭和六十年刊)三一五頁)とされている。

そのような現況の中にあつて、近時発表された新井弘順氏「声明の楽譜と記譜法の変遷」(『音楽叢書』日本音楽・アジアの音楽4)昭和六十三年刊)では、筆者の提供した訓点資料の古例を参考にして、節博士の起源に関しては今後訓点資料の方面からの研究が重要であろうという意見を提出されている。ここに至つて、節博士の起源論は、俄かに訓点研究との結び付きが問われることになつたのである。

本稿は右の様な要請に應える為に、訓点資料の節博士の実態を調査し、本邦における節博士の起源に就いて検討するも

のである。

## 二、節博士に関する通説

扱、従来の伝統的な区分によると、節博士（以下博士と呼称す）は古博士、目安博士、五音博士の三種に分類される。

この三種類の關係に就いて、声明研究の従来の諸説をまとめれば、次のようである。

○源語の音韻（アクセント）と旋律とは密接に關係しており、従つてアクセントを示す博士は、当初一致していた（注<sup>1</sup>）。

○その様な初期的段階の節博士はネウマ式（ギリシア語の「指図する」の意味。音感のままに線の上下で記述する）の古博士と呼ぶものである。（注<sup>2</sup>）

○平安末期に到つて声明の音階が五音として明確に自覚されるに到り、五音博士が作成された。五音博士の最も古い例は十一世紀末頃の伝法円上人の記譜例である。（注<sup>3</sup>）次いで年代明記の最も古いものは無動寺藏「引声阿弥陀經」

（本奥「建曆三年九月十九日以蓮入房本写博士畢」とある転写本。湛智が使用したことの確かな例）である。（注<sup>4</sup>）

○古博士と同様ネウマ式原理によりつつ、旋律型（特に「ユリ」）の區別をより明確にし得る様に改良されたものとして目安博士が発生した。この目安博士の現存最古の例

は良忍上人「四智梵語讚」（大念仏寺藏、天承元年写）であつて、そこから目安博士の創始者は良忍上人とされている。（注<sup>5</sup>）

扱、このような考え方に対して、片岡義道氏は、節博士の原流に就いて、演繹的な論法によりつつ次の様な考え方を提示されている。（注<sup>6</sup>）

○十一世紀の法円の五音譜が有り、これより古いとされ得る様な古博士の例が見当たらないことから、従来ややもすれば文字のアクセント符号としての機能に発すると思われ古博士よりも後の考案と考えられてきた五音博士は、少なくとも資料的には、そうであることが実証できない。

従つて、五音譜の起源はどうやら日本の声明家の考案になるものではなく、むしろ声明が渡来した時に同時にもたらされたカイロノミー（ギリシア語の「手」を意味する *chei* から出たものであつて、手の動きやその指示によつて旋律の上がり下がりや拍子を伝達する方法）が記録されたものであるらしく、これがアクセント符号としての機能を持つネウマ（これは恐らく中国を経由して渡来したものであろう）とともに、並行して用いられ、これが声明譜の初期の二形態である五音博士と古博士を形成したものであろう。声明譜の起源に就いて、それが外来のものか、日本側の発明に係るものか曖昧にされていたが、ここで中国經由説が提出されたことになり、其の点重要な意味を持つものである。

然し乍ら、この論は具体的な資料によりつつ論証されたものとは言えない。

その故であろう、近時発表された先引福島和夫氏の解説でも、この片岡氏の起源論に就いては全く言及されていない。

その福島氏の解説では、各博士に就いて次の様に纏められている。(以下取意)

○只博士(ただはかせ) (古博士) 機能・形態的特徴は直線弧線により、旋律線の大体の骨組みを視覚的・具象的に表現する。平安期の末には使用され、円珠房喜淵(一一二五四)一三一九)はこれを只博士と称し五音博士とともに広く用いている。次述目安博士を只博士と呼ぶ場合も有り、名称が混乱している。只博士は平安期より江戸期中頃まで長期間に亘り、広範囲に使用された。

○目安博士 旋律線を視覚的・具象的に表示する点では只博士と同様であるが、只博士が旋律線の凡その骨組みを表すのに対し目安博士は旋律のより細部にまで及び、技法・奏法等を詳細に表示する。目安博士の上限について、諸説は天承元年(一一三二)の良忍自筆「四智譜」を記すが、同譜原本は大念仏寺に現存せず、従って資料的に確認できない状況である。ともかく、只博士が先行し、次いで目安博士が考案されたものと思われる。

○五音博士 垂直・水平・斜行の譜線の方向・角度とその出発位置とにより、音高を表示する。天台五音博士は

十三世紀には喜淵によって用いられている。真言五音博士は、南山進流の覚意によって考案され、資料的には文永七年(一一七〇)を初出とする。

具体的な残存資料を尊重し、帰納的な態度で節博士の歴史の展開を記述すれば、右の様な所に落ち着くということであろう。そしてそれは従来通説とされて来た所と殆ど違いは無いと言つて良いものである。最も古いと考えられる古博士がいつ頃からどの様な人々によって使用されはじめたかについては依然として解決されてはいないと言わねばならない。

以上、要するに、その源流や発達は未だ不明というのが節博士(声明譜)研究の現状である。

### 三、節博士資料の概観

大山公淳氏『仏教音楽と声明』二四六頁に『南山進流乞戒声明事』(南山成蓮院真源著)という書を紹介され、その中に「古本一向に声明譜なし」とある旨の引用がなされている。その同書には亦「寛朝へ九一六く九九八く相承の本に譜博士あれど今観るに何の繩準もなく理解し難く紀伊上人手点の古本今尚これあり」とある旨の指摘がある。別に大山氏は「故松本文三郎博士所蔵の法華懺法(上欄注「天平時代写として伝えられていた」)断簡には極めて簡単ではあるが音譜が付けてあった。平安朝の本には時々譜入りを見るがそれら

は寧ろ古博士の一分と解される。」とされている。この中の「平安朝の本」とは、一本は既引の法円聖人「三礼」、一本は金沢文庫蔵正和二年へ一三二三「淨業手沢本であつて、共に平安時代の確例とはならないものである。寛朝及び紀伊上人（『野沢血脈集卷三』）にある「慶嚴（配阿闍梨天本二年十月十五日於同院伝受）」と同人か）は確かに平安朝僧であるが、これも亦確例とはならない。

従来（注7）の声明研究書では、平安時代に博士加點資料が有つたという証拠は右の様な記録や伝承としてのものしか取り上げられていないようである。

声明の本山である大原三千院の現存声明資料においても、最も古い例は次の様に鎌倉時代に入つてからのものである。

（注7）

○念仏結願導師作法（俯12号）―奥書「宝治元年（本）八月十四日以善法房律師御本書写之了／幸円」五音博士三千院声明資料中、本奥で辿れる最も古いものは次の資料であつて、院政時代までも遡ほれない

○慈恵大師供次第（俯19号）―奥書「本云建曆三年十一月三十日以蓮入房（湛智）本書写之了／交了」  
「文永六年三月廿九日書了／一交／円修」五音博士

次に視点を替えて、声明として著名なものに就いて、いつ頃から譜が加え始められたか、あるいは平安朝の譜本が有る

かどうかについて概観しておこう。

### 1. 理趣経

○伝理源大師（聖宝へ八三二〜九〇九）写本―無点（複製本による）

○大東急記念文庫蔵永治二年藤原教長写本―無点

○同右蔵 建久四年写本―無点

等、平安院政時代の資料は全て博士加點無し。加點の一番古いものは

○高山寺蔵本（一部27号）―奥書「写本云／元仁二年正月廿二日於仁和寺尊勝院以僧都御房御本声並博悉写取了／仏子良耀」

であつて、鎌倉時代に入つてからのものである。尚、仁和寺孝源版理趣経の奥書によつて、守覚法親王へ一一四一〜一二〇一の本にも博士は無く声点のみが加點されていたことは奥村三雄博士が指摘されている。（注8）これらの事実から、理趣経の場合、博士が加點される様になるのは鎌倉時代に入つてからと考えられる。

### 2. 八名普賢陀羅尼経

○石山寺蔵保元三年点本（一切経33函号）―東大寺三論宗点加點、博士無し。

○同右蔵（校倉16函7号）―無点

○同右蔵（校倉16函2号）―無点

等、平安院政時代の資料は、全て無点か、訓点本でも博士

は加点されていない。博士加点の最も古いものは

○高山寺旧蔵京都国立博物館蔵守屋コレクション貞応三年写・加点本―奥書「貞応三年六月廿七日以木工権頭

孝道本無博士書許也書写畢／於音曲者先年所伝習也／仏子行遍」

である。全巻に朱声点・墨博士及び仮名音注が加点されている。この奥書中の「無博士、譜許也（ハカセナシ、フバカリナリ）」の意味がやや不明瞭であるが、「節博士」が無かったことを言うものとすれば、東寺僧行遍（一二六四没）の頃に八名経への加点が始まったことになる。八名経の博士加点資料はかなり見られるが殆ど室町時代以後のものである（注9）。

### 3. 仏説阿弥陀経

○京都国立博物館蔵守屋コレクション平安後期写本―無点

○同右別本―無点

○大東急記念文庫蔵嘉禎二年刊本―無点

等、平安く鎌倉初期の諸本には博士加点資料は見られない。但し、前引の片岡義道氏「声明譜の二系統について」には仁和寺蔵「阿弥陀経」鎌倉初期写本に声点と博士が加点されているとして紹介されているから、これによれば、阿弥陀経の博士加点も鎌倉初期頃より始まったことが考えられる。尚東寺等には多数の博士加点資料が有るが、いずれも室町く江戸時代のものである。（注10）

### 4. 諸法則集（声明集）

○高山寺蔵念誦次第天養元年頃写・加点本（II部235号）

―朱声点・仮名。博士無し。

○石山寺蔵法則集久安二年写・加点本（校倉2函5号）

―朱声点・仮名。博士無し。

○同右蔵胎蔵界・金剛界（法則集）院政期写・加点本（深密3函2号）―朱声点・仮名。博士有り。

○金沢文庫蔵聖宣本声明集仁治三年本奥書本―博士のみ有り。（注11）

○東寺蔵法則集弘安五年宣遍写本（一四九函2号）―声点・仮名。博士有り。（注12）

等、これら声明集においても、残存資料の範囲では、博士加点は鎌倉時代に入ってからのもので殆どである。ただ石山寺蔵『胎蔵界・金剛界』は識語は無いが明らかに院政時代の加点本である。管見の範囲では最も古いものであり、従来の研究では取り上げられてはいないが、所謂「声明集（また法則集）」としてはその早いものの一つと考えられるものであつて注目される。

### 5. その他の讚類

○石山寺蔵吉慶梵語讚院政期写本（校倉2函4号）―無点

○同右蔵普賢菩薩行願讚院政期写本（校倉2函17号）―無点

○同右藏普賢行願讚院政期写・加点本（校倉<sub>2</sub>函<sub>1</sub>号）

―朱点（仮名・東大寺点）・博士無し。

○高山寺藏文殊讚鎌倉初期写・加点本（一五七函<sub>2</sub>「4

一号）―朱声点・墨仮名。博士無し。

○同右藏文殊讚鎌倉後期写・加点本（二部<sub>3</sub>1号）―墨

仮名・博士

○金沢文庫藏諸讚（詳細は『金沢文庫資料全書 第8巻

歌謡・声明篇 続』に譲る）―いずれも鎌倉時代以後

のものであつて、本奥書で辿れる最も古いものは、『

讚二〔秘讚集〕』の識語「書本云／仁治元年<sub>1</sub>十月九

日聊所愚意之廻私博士付定畢／金剛資定意」の仁治元

年へ一二四〇である。

今だ多くを調査し得ていないが、右の様に讚類に於ても平

安く院政期には博士資料を見出すことは出来ない様であり、

鎌倉時代に至つての確例しか紹介されていない。

#### 6. 講式類

講式類に博士が加点された最も古いものは

○東寺藏仏生会式寿永三年写・加点本（一三三函1号）

―伽陀部のみに博士有り。

であろう。その他、「往生講式」「六道講式」等に就いて

は詳しい調査を遂げていないのを遺憾とするが、管見に及ん

だもの（金沢文庫藏諸本、東寺一三三函及び一六四函所藏諸

本、高山寺一一三函所藏諸本等）はいずれも室町時代以後の

ものである。尚、「四座講式」に就いて言えば、本文が明恵上人によつて建保二年へ一二二〇から三年にかけて作成されたものであるから、博士加点資料の出現もそれ以後ということになる。

#### 7. 和讚類

和讚の古写本の中、次の様な平安時代のものには博士加点資料は見られない。

○唯摩吉菩薩和讚院政期写本（石山寺一切経附一〇二号

）

○高山寺古和讚集永久四年識語本（一八二函<sub>2</sub>号）<sub>（註13）</sub>

博士加点資料として最も古いものは

○金沢文庫藏舍利讚嘆貞永元年伝授識語本

の鎌倉時代初期のものの様である。

#### 8. その他の博士資料

声明以外に博士を使用した資料群として「声歌<sub>シヨウカ</sub>」「

朗詠」「神楽」「平曲」「謡曲」があるが、これらの資料群

に於てはいずれも鎌倉時代以後のものであつて、平安時代に

これらの資料群に博士が使用されていたことを示す確例は無

い様である。

扱、以上概観した様に、従来紹介されてきた博士資料には

平安時代の確例は一点も存在していないのである。

#### 四、訓点資料に於ける節博士

従来の声明研究に於ける節博士の研究は、単行の声明・

声明集（各法会の基本的声明を類聚したもの）・法則集（特  
定法会の声明を次第順に列挙したもの）・秘蹟集（蹟を集成  
したもの）・伽陀集（伽陀を集成したもの）が直接の研究対  
象とされてきた。筆者はそこに節博士研究の、特にその源流  
研究の盲点があった様に思う。なぜならば、声明は仏教の特  
定法会の一部を構成するものであつて、始めから各各の声  
明がそれだけで独立したようなものでは無かつた訳であり、  
それが独立して取り扱われるようになるのには、それなりの  
時間の経過を要したと推定される。平安時代に、単行声明や  
声明集の譜本が指摘出来ないことがその推定を裏づける。そ  
のように成立そのものが遅れた単行の声明・声明集等が研究  
の対象とされている限り、起源・源流の問題は解決されえな  
いはずである。

扱、そのような盲点をカバーする資料として仏教の特定法  
会の次第を記した儀軌類が考えられる。以下、この項では密  
教に於ける儀軌類の訓点資料を取り上げ、そこに加點されて  
いる節博士に就いて検討してみることとする。

### (1) 博士加點訓点資料の概観

まず、はじめに筆者が今までに調査し得た博士加點資料

を時代順に列挙してみると次の様になる。

1. 1034 金剛界儀軌（大東急記念文庫藏・築島裕博士「大東  
急記念文庫藏金剛界儀軌の古点について」（『かがみ』  
第一一号）に手がかりを得、松本光隆氏の移点本を借用  
した）。

長元七年成尋加點、天台宗寺門派、朱博士あり、朱声点  
・仮名あり。（他に永延元年文慶加點、永延・長保間文慶  
加點か、長保六年文慶加點、延久二年隆覚加點の諸点有  
り、其中延久二年点にも博士を使用）。

《以下の用例の片仮名は振り仮名、平仮名はヲコト点》  
・・・啓請真言曰

野<sup>ヒ</sup> 毘<sup>エム</sup> 焔<sup>チル</sup> 尾<sup>ヒ</sup> 退<sup>キヤナ</sup> 異<sup>サ</sup> 娑<sup>サ</sup> 斫<sup>キヤ</sup> 迦

羅<sup>ア</sup> 悉<sup>真</sup> 地<sup>シヤ</sup> 写<sup>モ</sup> 弘<sup>ヘイ</sup> 陞<sup>ハリ</sup> 鞣<sup>リ</sup> 梨<sup>リ</sup> 縛<sup>リ</sup> 曰<sup>リ</sup> 囉<sup>タ</sup> 車<sup>リ</sup> 茶<sup>リ</sup> 利<sup>リ</sup>

係<sup>ケイ</sup> 都<sup>ト</sup> 毘<sup>ヒ</sup> 焔<sup>エム</sup> 哆<sup>ト</sup> 毘<sup>エム</sup> 焔<sup>マ</sup> 麼<sup>ソ</sup> 薩<sup>ト</sup> 覩<sup>サ</sup> 娜<sup>ナ</sup> 異<sup>ナ</sup> 莫<sup>マ</sup>

（本文略）  
ひよを

ア エ ト サルヘイホハ タイキヤサラ ハ ラ  
阿<sup>ア</sup> 演<sup>エ</sup> 都<sup>ト</sup> 薩<sup>サ</sup> 吠<sup>ヘイ</sup> 步<sup>ホ</sup> 縛<sup>ハ</sup> 乃<sup>タイ</sup> 迦<sup>キヤ</sup> 娑<sup>サ</sup> 囉<sup>ラ</sup> 鉢<sup>ハ</sup> 囉<sup>ラ</sup>





次四智讚

(四行梵讚無点)

(中略)

次結根本印誦不動百字明加持自身令

堅固之

俺阿三麼、三曼多都那多、但縛必底

舍薩、你訶羅、娑摩羅拏、尾藥

多母駄達摩帝薩羅、三摩縛羅荷

羅、但羅耶、伽那、摩訶

縛羅路乞叉祢入縛羅、那娑迦隸

娑縛、訶

3. 1050十二天法(高山寺83函15号)

平安後期写・加點、叡山点、天台宗山門派、朱博士あり、朱声点・仮名あり、

諸天等讚

阿引演引觀泥縛左我素羅繫

那羅那上羅樂又迦羅那野

鉢囉、達摩藥里多地

伽羅三尾達摩左鉢羅捨麼

操企也你銘多部多銘多鉢

羅迦捨夜、但你賀室羅摩

拏也駄引捨引

4. 1051金剛界儀軌(高山寺11部114号)

永承六年写・加點、西墓点、天台宗寺門派、朱博士あり、朱声点・仮名あり、(別に、墨点(保安四年)の博士・仮名あり)、



也<sup>引</sup>尾<sup>勢</sup>麗<sup>引</sup>数<sup>人</sup>蜜<sup>淨</sup>播<sup>引</sup>囉<sup>蜜</sup>珍<sup>引</sup>速<sup>ソク</sup>

者<sup>四上</sup>摩<sup>囉</sup>細<sup>引</sup>便<sup>引</sup>演<sup>二合</sup>怛<sup>引</sup>他<sup>引</sup>婆<sup>引</sup>藥<sup>南</sup>舍<sup>引</sup>吉<sup>一</sup>

也<sup>二合尺</sup>僧<sup>引</sup>囉<sup>引</sup>易<sup>引</sup>弩<sup>引</sup>怛<sup>引</sup>他<sup>引</sup>賀<sup>加賀</sup>

魔<sup>囉</sup>惹<sup>演</sup>乞<sup>栗</sup>怛<sup>縛</sup>滴<sup>拏</sup>檻<sup>歷</sup>

洛<sup>法</sup>夜<sup>引</sup>没<sup>引</sup>菓<sup>二合</sup>哈<sup>八夜</sup> (朱点のみを示す)

6. 1063 金剛界儀軌 (早稻田大学蔵)

仁都波迦点、天台宗山門派、築島博士の資料1引用論文に「〜」形の博士ありとして引用。筆者未見。

7. 1077 胎藏界次第 (高山寺日部36411-2号)

延久四年頼尊写、承保四年加點、ヲコト点なし、系統不明、墨博士あり、但し延久の奥書中に「執筆頼尊之」とある「頼尊」は「天台血脉」に「経還頼尊」<sup>字法法華章</sup>とある僧に比定出来、天台宗山門派かと推定される。

次警発地神 警發長跪定手持并当心手懸舒五指甲掌按也每誦真言按地

真言曰怛<sup>引</sup>鏝<sup>二合</sup>泥<sup>引</sup>尾<sup>引</sup>娑<sup>引</sup>乞<sup>引</sup>叉<sup>引</sup>

部<sup>引</sup>珍<sup>引</sup>悉<sup>引</sup>薩<sup>縛</sup>没<sup>引</sup>駄<sup>引</sup>囉<sup>引</sup>珍<sup>引</sup>

易<sup>南</sup>左<sup>理</sup>也<sup>引</sup>囉<sup>引</sup>尾<sup>勢</sup>麗<sup>引</sup>数<sup>人</sup>

部<sup>引</sup>蜜<sup>淨</sup>播<sup>引</sup>囉<sup>密</sup>珍<sup>引</sup>速<sup>引</sup>者<sup>四上</sup>摩<sup>囉</sup>

細<sup>引</sup>便<sup>引</sup>演<sup>二合</sup>怛<sup>引</sup>他<sup>引</sup>婆<sup>引</sup>藥<sup>南</sup>舍<sup>引</sup>吉<sup>一</sup>也

僧<sup>引</sup>囉<sup>引</sup>易<sup>引</sup>弩<sup>引</sup>怛<sup>引</sup>他<sup>引</sup>賀<sup>引</sup>魔<sup>囉</sup>

惹<sup>演</sup>乞<sup>栗</sup>怛<sup>縛</sup>滴<sup>拏</sup>檻<sup>歷</sup>洛<sup>法</sup>

夜<sup>引</sup>没<sup>引</sup>菓<sup>二合</sup>哈<sup>八夜</sup>

(本文略)

次誦諸佛慈愍等偈 取音

諸佛慈愍有情者 唯願存念於我等

我今請白諸賢聖 堅牢地天并眷屬  
一切如來及佛子 不捨慈願悉降臨  
我授此地求成就 為作證明加護我  
誦了結地天仰誦

(本文略)

次讚嘆五寶及大寶并四寶讚皆印誦讚可動之

先佛讚 摩賀迦魯 坭建曩貪捨娑

珍合引藍薩縛藍薩反引你泥以反南合奔轉反女女音那

地蠅合窠合拏合馱合藍合鉢合羅合拏合摩合弭合但

他引我引耽引

次法讚 吠羅擬野合惹合曩合南合杻合

談合戎合婆合訥合藥合底合謨合左合劍合播合羅

杻合體合迦合謎合建合耽合曩合謎合達合磨合舍合舍合麼合縛合感

次僧讚 穆訖耽合穆訖底合播合他合鉢合羅合

耽合多合訖合訖合灑合野合素合弭合野合婆合娑合

乞合囉合旦合覽合尾合始合瑟合鳥合窠合拏合勃合曩合謎合僧

健合左合婆合婆合體合羅合縛合珍合

次金剛讚 (陀羅尼無点)

次天讚 (陀羅尼無点)

次大讚 (陀羅尼無点)

次四智讚 唵縛日羅合薩合但合縛合僧合藥合羅合

訶合縛合日合囉合囉合旦合曩合麼合努合哆合覽合縛合日合囉

達合麼合我合也合奈合縛合日合囉合羯合麼合迦合路合婆合縛合

(卷下末)

蓮華部讚

薩縛母駄□羅捨婆多野三勃里多野窠隸窠覽

縛路枳多僧枳嬢野曩謨寧殿摩賀答摩尔ネイ

金剛部讚

摩賀摩羅野替拏野上尾チアラ弥羅惹野娑駄吠納難多

娜摩迦曩謨悉帝縛日羅播拏曳

8. 110胎藏界儀軌(石山寺深密112函19号)

院政初期写・加點、西墓点、天台宗寺門派、朱博士あり、

朱声点・仮名あり、

次警発於地神 應説如是偈

担ハム 鏝アイ 泥ヒ 尾サ 娑キ 乞サ 又ホ 部タ 珍引 悉引

薩縛サ 沒引 駄引 曩引 珍引 易引 南引 左引 哩引

也引 曩引 也引 尾引 勢引 麗引 数引 蜜引 播引

羅密珍引 速引 者引 摩羅引 便引 演引 担引 他引 婆引

藥南引 舍引 吉引 也引 僧引 四引 曩引 珍引 易引 弩引

9. 111金剛界儀軌(東寺131函14号)

天永二年写・加點、東大寺点、真言宗小野流力、朱博士あり、朱声点・仮名あり、

諸如来集会皆在於虚空誦百八名贊

礼曼茶羅衆讚曰 龕龕龕龕(陀羅尼無博士部省略)

六唵縛日囉惹蘇沒駄哩迦耶引 縛引

日啣引 矩捨担引 他引 藥多阿目伽羅引

惹縛日囉引 擬哩耶引 縛日囉引 獨沙引



阿引演去声引都薩引吠引步引縛引乃引迦引娑引鉢引鉢引羅引  
二合拏引弭引哆引世引沙引迦引敢動句反羅引摩引羅引

(以下省略)

11. 114 聖閻曼德迦威怒王立成大神驗念誦法 (馬頭念誦儀軌)

(東寺30函33号)

永久二年写・加點、西墓点、天台宗寺門派、朱博士あり、  
 朱声点・仮名あり、

位此加持成就身已即誦大威德明

王讚

曩モ莫引縛引羅引娜引縛引日引羅二合藥二合羅二合  
スツ曼引儒引具引灑引摩引賀引麼引羅引娑引賀引娑引  
エイ囉二合吠引遇引尾引惹引曳引尾引觀引曩二合囉二合瑟主  
エイ囉二合跋引末引那引迦引

12. 114 金剛夜叉儀軌金剛寶訣 (東寺132函12号)  
 永久二年写・加點、西墓点、天台宗寺門派、朱博士あり、  
 朱声点・仮名あり、

讚嘆菓叉金剛曰

縛引日引羅二合愛引咄引羅引菓引叉引縛引日引羅二合底引

哩引寧引尾引蒲引梨引賀引寧引縛引日引羅二合

摩訶菓引乞引叉引羅引乞引叉引婆引寧引伽引

寧引也引噀引

13. 118 胎藏界儀軌 (高山寺11部363号)

永久六年写・移点、朱点宝幢院点、天台宗山門派、墨博士あり、朱墨声点・仮名あり、(他に仁安二年朱点あり)、

彼一切馳散 警發於地神 応説如是偈

雙膝長跪定手持 卍字心蓮手 舒五指 平掌按地

担 鍔<sup>二合</sup> 泥<sup>引</sup> 尾<sup>引</sup> 娑<sup>引</sup> 乞<sup>引</sup> 叉<sup>引</sup> 鬘<sup>引</sup>

部<sup>引</sup> 跢<sup>引</sup> 悉<sup>引</sup> 薩<sup>引</sup> 縛<sup>引</sup> 没<sup>引</sup> 駄<sup>引</sup> 鬘<sup>引</sup>

跢<sup>引</sup> 易<sup>引</sup> 南<sup>引</sup> 左<sup>引</sup> 哩<sup>引</sup> 也<sup>引</sup> 鬘<sup>引</sup> 也

尾<sup>引</sup> 勢<sup>引</sup> 麗<sup>引</sup> 数<sup>引</sup> 部<sup>引</sup> 蜜<sup>引</sup> 播<sup>引</sup>

蜜<sup>引</sup> 跢<sup>引</sup> 速<sup>引</sup> 者<sup>引</sup> 摩<sup>引</sup> 羅<sup>引</sup> 細<sup>引</sup>

便<sup>引</sup> 演<sup>引</sup> 旦<sup>引</sup> 他<sup>引</sup> 婆<sup>引</sup> 藥<sup>引</sup> 南<sup>引</sup> 舍<sup>引</sup> 吉<sup>引</sup>

也<sup>引</sup> 僧<sup>引</sup> 四<sup>引</sup> 鬘<sup>引</sup> 跢<sup>引</sup> 易<sup>引</sup> 弩<sup>引</sup>

担<sup>引</sup> 他<sup>引</sup> 賀<sup>引</sup> 魔<sup>引</sup> 羅<sup>引</sup> 惹<sup>引</sup> 演<sup>引</sup> 乞<sup>引</sup> 栗<sup>引</sup>

担<sup>引</sup> 縛<sup>引</sup> 滿<sup>引</sup> 拏<sup>引</sup> 檻<sup>引</sup> 歷<sup>引</sup> 洛<sup>引</sup> 去<sup>引</sup> 夜<sup>引</sup>

没<sup>引</sup> 藥<sup>引</sup> 哈<sup>引</sup>

(以下讀有れども無点)

14. 1127十一面自在菩薩儀軌 (東寺30函23号)

天治二年写、大治二年加點、宝幢院点、天台宗山門派、朱博士、朱墨声点・仮名あり、

・・・説自根本密言曰

鬘談羅旦鬘<sup>引</sup> 旦羅<sup>引</sup> 夜<sup>引</sup> 也<sup>引</sup> 鬘<sup>引</sup> 莫<sup>引</sup> 阿<sup>引</sup>

哩<sup>引</sup> 夜<sup>引</sup> 枳<sup>引</sup> 壞<sup>引</sup>

尾<sup>引</sup> 喻<sup>引</sup> 訶<sup>引</sup> 羅<sup>引</sup> 惹<sup>引</sup> 也<sup>引</sup>

藥<sup>引</sup> 莫<sup>引</sup> 阿<sup>引</sup> 也<sup>引</sup> 縛<sup>引</sup> 路<sup>引</sup> 枳<sup>引</sup> 帝<sup>引</sup>

(以下省略)

15. 1128聖賀野乞里縛大威怒王立大神驗供養念誦儀軌法品 (馬頭念誦儀軌) (東寺113函1号)

大治三年写・移点、西墓点、天台宗寺門派、朱博士あり、朱声点・仮名あり、

・・・応以清雅梵音誦驚覺聖衆真言<sup>の</sup>・・・

真言曰<sup>の</sup>・



俺阿夜四試伽覽素藥珍積孃吠

我多人鉢羅拏日帝縛羅薩旦縛

尾訖羅麼迦魯四薩錢縛羅那摩賀

即誦蓮花部一百八名讚普礼一

切聖衆誦讚歎曰

惹野覩没哩拏羅餉法惹宅計捨迦羅

跛馱覽鉢那麼縛嘲我拽瑟置旦羅野寧

旦羅娑賀娑羅步贊娑旦多那莫娑

(中略)

次誦本尊讚歎曰

唵縛日羅達摩蘇娑旦縛他縛日羅鉢

那麼蘇輸馱迦路計濕縛羅蘇縛日羅乞

又縛日羅寧旦羅曩牟薩都諦

111 良忍自筆四智梵語讚

従来の研究に於て最も古い目安博士の例とされて来たもの。但し現物は行方不明で、一般に紹介されているのは江戸時代の宗淵による摸刻本であつて、其の点確實な例とは言い難い。

16. 1135 仏説無量寿仏化身大忿迅俱摩羅金剛念誦瑜伽儀軌法

(馬頭念誦儀軌) (東寺30函26号)

保延元年写・加點、西墓点、天台宗寺門派、朱博士あり、

朱墨声点・仮名あり、

(用例省略)

17. 1142 十八道次第 (高山寺182函42号)

永治二年写・加點、宝幢院点、天台宗山門派、朱博士あり、

り、朱声点・仮名あり、

(九方便の漢語讚に博士有り)

次出罪方便……

无始生死流轉中 具造極重无盡罪  
親對十方現在佛 悉皆懺悔不復作

(中略)

(卷末部)

次讚 普印随尊各別若是不動尊

讚曰

曩莫薩縛母 馱苦地薩担縛南薩縛  
担洛僧句素須多鼻枳惹羅始吠  
曩摩素都帝娑縛訶

18. 1147成就瑜伽觀智十二天儀軌(東寺131函27号)

久安三年写・加點、西墓点、天台宗寺門派、卷末に次の讚を付載(墨博士・声点・仮名)、

金剛讚

摩賀麼囉野贊拏野尾你野羅惹野  
娑馱吠訥難多那麼迦夜曩謨悉帝縛  
日叫播拏曳

19. 1148(甘露軍荼利儀軌力)(高山寺182函48号)

久安四年写・加點、宝幢院点、天台宗山門派、朱博士あり、朱声点・仮名あり、

(前略)

樓閣中有曼荼羅上有、磐石、上牛字、  
變成盜瓶……  
无量忿怒衆、金剛諸天圍繞作侍衛

(出)摩訶麼囉耶戰拏耶尾你也囉惹也娑



ナ  
アモ  
南无清浄法身毘盧遮那仏

(以下省略)

22. 1152 (十二天法力) (高山寺182函59号)

仁平二年写・加点、加点系統不明、朱博士あり、朱声点・仮名あり、虫損甚し、

次諸天漢語讚三反

天阿蘇羅ヤキシヤ叉等来聴法者ヨウ心  
擁護イウ仏テイ法ト使シ長シ存ソ各ク各ク勤キン行カウ世カウ尊カウ教  
諸有聴徒来此至或在コク地上シヤウ或居コク空キヨ

(以下省略)

23. 1181 理界略次第 (高山寺65函19号)

治承五年写・加点、中院僧正点、真言宗高野山、朱博士あり、朱墨声点・仮名あり、

(用例省略)

24. 1190 金剛頂瑜伽經卷三 (随心院2函13号)

院政末期写・加点、西墓点、天台宗寺門派、朱博士あり、朱声点・仮名あり、

(用例省略)

25. 1202 胎藏界念誦次第 (高山寺65函23号)

建仁二年写・加点、東大寺点、真言宗小野流力、朱博士あり、朱墨声点・仮名あり、

(用例省略)

26. 1200 大曼荼羅灌頂儀軌 (高山寺115函35号)

鎌倉初期写・加点、円堂点、真言宗、朱博士あり、朱声点・仮名あり、

(用例省略)

以下鎌倉時代のを省略する。

以上の二十六点の資料を纏めると次の様になる。

資料番号	資料名	加添時期	加添系統	博士加添部分	博士の形態			
1	金剛界儀軌	一〇三四	天台宗寺門派	梵語	平	上	去	入
2	不動念誦次第	一〇三七	天台宗山門派	梵語	平	上	去	入
10	金剛界儀軌	一〇四五	天台宗寺門派	梵語	平	上	去	入
3	十二天法	一〇五〇頃	天台宗山門派	梵語	平	上	去	入
4	金剛界儀軌	一〇五一	天台宗寺門派	梵語	平	上	去	入
5	胎藏界儀軌	一〇五二	天台宗山門派	梵語	平	上	去	入
6	金剛界儀軌	一〇六三	天台宗山門派	梵語	平	上	去	入
7	胎藏界次第	一〇七七	天台宗山門派	梵漢語	平	上	去	入
8	胎藏界儀軌	一一〇〇	天台宗寺門派	梵語	平	上	去	入

20	19	18	17	16	●	15	14	13	12	11	9	
聖无動尊捨誦儀軌	(甘露軍荼利儀軌)	成就瑜伽觀智十二天儀軌	十八道次第	仏觀無量壽化身大忿迅俱摩羅金剛念誦瑜伽儀軌法	良忍自筆四智讚	馬頭念誦儀軌	十一面自在菩薩儀軌	胎藏界儀軌	金剛夜叉儀軌	馬頭念誦儀軌	金剛界儀軌	
二五〇	二四八	二四七	二四二	二三五	二三一	二二八	二二七	二二八	二二四	二二四	一一一	
天台宗山門派	天台宗山門派	天台宗寺門派	天台宗山門派	天台宗寺門派	天台宗大原	天台宗寺門派	天台宗山門派	天台宗山門派	天台宗寺門派	天台宗寺門派	真言宗	
梵語	梵語	梵語	梵漢語	梵語	梵語	梵語	梵語	梵語	梵語	梵語	梵語	
	ㄣ		ㄣ		声点と無關係に加点 ユリ… スク・ その他ㄣㄣㄣ を使用			ㄣ			ㄣ	
ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ			ㄣ			ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
ㄣ		ㄣ	ㄣ	ㄣ		ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ

26	25	24	23	22	21
大曼荼羅灌頂儀軌	胎藏界念誦次第	金剛頂瑜伽經	理界略次第	(十二天法)	胎藏界・金剛界(法則集)
二〇〇頃	二〇二	二九〇	二八一	二五二	二五〇
真言宗	真言宗小野流	天台宗山門派	真言宗高野山	不明	真言宗
漢語	漢語	梵語	漢語	梵漢語	梵漢語
ε c s	c s v	c	l r	l r	l c v c ...
r	c	c	l r	l	l c v c ...
c c w	c r	c	l r	l r	c r l r c ...
~	c		l	l	l c v c ...

(2) 節博士の発生と発達

扱、以上の訓点資料の博士の実態を基にして、博士の発生及び発達に就いて考えられる所を述べてみたい。

① 訓点資料の「ㄣ」「ㄥ」等の曲線記号は、アクセント記号ではなく、旋律型を示す節博士の原型であること。まず問題となるのは「ㄣ」「ㄥ」等の符号はなにかということである。この点に就いては、これらの符号が加点されて

いる部分から自ずと限定できる。これらの符号の加点部分を二・三詳細に例示してみるとつぎの様である。

1. 金剛界儀軌 啓請真言(梵語) 伽陀(梵語) 百八名讃(梵語)
2. 不動念誦次第 無動別讃(梵語) 仏讃(梵語) 百字明(梵語)
3. 胎藏界次第 警発地神偈(梵語) 諸仏慈悲等偈(漢語) 仏讃(梵語) 法讃(梵語) 僧讃(梵語) 四智讃(梵語) 蓮華部讃(梵語) 金剛部讃(梵語)

即ち、その加点はそれぞれの法会に使用された讚・偈（伽陀）及び真言でも「誦ス」と規定の有る部分―声明として唱えられる部分―のみであることが知られる。それは即ちこの符号がアクセント記号として加点されたものではなく、旋律の型を示す記号―節博士―の原初形であることを物語っている。

片岡義道氏「声明譜の二系統について」では、鎌倉初期写の『阿弥陀讚』等初期資料では、博士の出と声点とは常に一致していることから、古博士の本来の性格はこの様なアクセント符号としての機能であったとされているが、この様な資料は実は時代が下って、全ての字に博士が加点されるようになってからのものであり、初期の実態は、アクセントは声点で示され、アクセント以外の長さを伴った旋律を曲線で示したと考えるべきである。これらの曲線がアクセントを示すとするれば当初から全ての字に加点が有るべきであるが、実際には極めて稀にしか加点がなされていない。それはこの記号が声明として歌詠される場合の特殊な旋律を持つ部分を示す有標記号として使用され始めたためと解釈される。

節博士は確かにアクセント記号として使用されるようになるが、それは時代的には下るものであり、全ての字に博士が加点されるようになった時点で、旋律記号から転換したものと考えるべきであろう。

②節博士は平安後期初頭に天台宗の僧によって発明されたと考えられること

まず、訓点資料に於ける博士の初見は管見の範囲では一〇三四年の金剛界儀軌であり、これ以後加点資料が続いて出現する。これ以前の同じ儀軌類に就いて調査してみると、梵語讚・漢語讚を含んで居り、然も声点・仮名の加点がなされていても、博士は加点されていないものばかりである。

○金剛界儀軌寛平元年へ八八九点（石山寺校倉<sub>1</sub>函7号）  
―別朱田堂点、天台宗系カ 博士無し

○胎藏秘密略大軌平安初期へ九〇〇頃点（東寺<sub>1</sub>函7号）  
―一字多法皇、乙点凶、天台宗 博士無し

○金剛夜叉儀軌平安中期点（石山寺校倉<sub>1</sub>函3号）―淳祐へ八九〇〓九五三点、真言宗 博士無し

○金剛界儀軌平安中期点（石山寺深密藏<sub>1</sub>函5号）―第一群点、順曉和尚点、 博士無し

○阿闍梨大曼荼羅灌頂儀軌寛弘五年へ一〇〇八点（東寺又別5函2号）―西墓点、天台宗寺門派 博士無し

○金剛界儀軌寛仁四年へ一〇二〇点（石山寺深密<sub>1</sub>函4号）―東大寺点、真言宗系カ 博士無し

○不動儀軌万寿二年へ一〇二五頃点（東寺<sub>1</sub>函2号）  
―第一群点、天台宗山門派カ、 博士無し

等等、他省略。

また、管見最古の、築島博士の紹介された大東急記念文庫



本金剛界儀軌に就いて見ても、長元七年点以前に加点された永延元年（九七八）文慶加点及び永延長保間文慶加点・長保六年（一〇〇四）文慶加点の諸点には博士は使用されていない。以上の様な実情から、博士使用の開始時期は平安後期初頭一〇三〇年頃であったと考えて良からうと思われるのである。

次に、その加点者に就いて見るに、平安後期の初出時期のものとは全て天台宗系のもののみである。真言宗系の明確な例は一一一年加点の9金剛界儀軌である。従って、博士の使用開始者即ちその発明者は天台宗の僧侶であったと考えられることになる。これ等博士の創始に係わった可能性の有る僧名を奥書から辿ってみると次の様になる。

◎唐房阿闍梨行円・三井寺（九七八〜一〇四七） 資料1 奥書

◎成尋・三井寺（一〇一一〜一〇八一） 資料1 奥書

◎鶏足房念円・三井寺（一〇一四〜一〇八三） 資料4 奥書

◎披雲房頼尊・三井寺（一〇〇〇〜一〇六六） 資料1 奥書

◎頼尊・延暦寺カ（一〇七七存） 資料7 奥書

更に資料の発掘を待たねばならないが、以上の資料の範囲で言えば、天台宗の中でも三井寺門派系の僧侶にプライオリティがあったのではないかと考えられる。

真言宗の資料は9金剛界儀軌以後、降って院政末期の<sup>23</sup>・<sup>25</sup>・<sup>26</sup>と増加してくる。このことは、真言宗に於ては、院政時代に入って、天台宗で先行使用されていた博士を借用して行ったことを伺わせる。資料<sup>2</sup>の法則集は真言宗の資料であるが、その巻末識語に「雙巖閣梨口伝」と有り、この「雙巖房頼昭」は次の様な血脈に在る天台宗山門派の僧侶である。



（必要部分のみ抽出）

この様な資料と併せて考えるならば、博士は天台宗から真言宗へと流れて行ったものであって、真言宗の僧侶の発明では無かったことになる。尚、この天台から真言への流れの意味に就いては改めて良く考えてみたい。

③節博士加点は梵語讀から始まり漢語讀へ及んで行ったと考えられること

安然（八四一〜九〇五）の『胎藏界大法対受記』巻第二に次の様な部分がある。

「……此小讚。又其大讚出大日経第七卷中及金剛頂

四卷六卷本<sup>一</sup>。經並皆唐翻。今玄法寺兩卷三卷儀軌出<sup>二</sup>其梵文<sup>一</sup>。慈覺大師伝<sup>三</sup>其詠曲<sup>一</sup>。又於<sup>二</sup>小讚<sup>一</sup>亦有<sup>二</sup>慈覺大師及珍和尚並正僧正三家詠曲<sup>一</sup>。讚岐守説慈覺大師此處伝<sup>二</sup>大日小讚<sup>一</sup>也。但珍和尚以<sup>二</sup>此小讚<sup>一</sup>為<sup>二</sup>法身讚<sup>一</sup>。……  
 〔『大正藏』第七十五卷七一頁〕

胎藏界大日の本尊讚である「大讚」には梵語讚と漢語讚とがあり、梵語讚は玄法寺法全の『大日經広大儀軌』に収載されている。慈覺大師円仁が其の梵語讚の詠法を伝えたと言うものである。同じく安然の著書『金剛界大法大受記』中にも金剛界法の中の諸讚・頌・偈に就いて同様の円仁の詠曲の伝承が記録されている。

これらの記録は、同じく陀羅尼咒であっても、旋律を伴って歌詠されるものと、切切読み（棒読み）されるものとがあったことを示している。平安初期の博士不使用資料に就いてはどこが声明として歌詠されていたかは明確ではないが、節博士が加点されるようになって、その部分がはっきりして来る。そこで其の博士の加点部分に注目して見たものが先表の「博士加点部分」である。詳細には次の様である。

1. 金剛界儀軌 啓請真言（梵語） 伽陀（梵語） 百八名讚（梵語）
2. 不動念誦次第 無動別讚（梵語） 仏讚（梵語） 百字明（梵語）
3. 十二天法 諸天等讚（梵語）

4. 金剛界儀軌 啓請真言（梵語） 伽陀（梵語） 百八名讚（梵語） 百字明（梵語）
  5. 胎藏界儀軌 警発地神偈（梵語）
  6. 金剛界儀軌 不明
  7. 胎藏界次第 警発地神偈（梵語） 諸仏慈愍等偈（漢語） 仏讚（梵語） 法讚（梵語） 僧讚（梵語） 四智讚（梵語） 蓮華部讚（梵語） 金剛部讚（梵語）
  8. 胎藏界儀軌 警発地神偈（梵語）
  9. 金剛界儀軌 百八名讚（梵語）
  10. 金剛界儀軌 （4に同じ）
  11. 馬頭念誦儀軌 大威徳明王讚（梵語）
  12. 金剛夜叉儀軌 葉叉金剛讚歎（梵語）
  13. 胎藏界儀軌 警発地神偈（梵語）
  14. 十一面自在菩薩儀軌 根本密言（梵語）
  15. 馬頭念誦儀軌 警覚真言（梵語） 百八名讚（梵語） 本尊讚歎（梵語）
- 良忍自筆四智讚 梵語四智讚（梵語）
16. 俱摩羅金剛念誦儀軌法 詳細未調査
  17. 十八道次第 九方便（漢語） 不動尊讚（梵語）
  18. 十二天儀軌 金剛讚（梵語）
  19. 甘露軍荼利儀軌 諸讚（梵語）
  20. 聖无動尊念誦儀軌 諸真言（梵語）

21. 胎藏界・金剛界法則集

胎藏界

唱礼 (梵・漢語) 九方便 (漢語)

大讚 (梵語) 仏讚 (梵語) 普賢菩薩

薩行願讚 (梵語) 四智讚 (梵語)

金剛界

唱礼 (梵・漢語) 五悔 (漢語)

百字讚 (梵語) 百八名大金剛吉祥

無上勝讚 (梵語) 普賢行願讚 (梵

語) 四智讚 (梵語) 十号讚 (梵

語) 文殊歌詠讚 (漢語) 法讚 (梵

語)

22. 十二天法

諸天漢語讚 (漢語) 諸天梵語讚 (梵語)

23. 理界略次第

九方便 (漢語)

24. 金剛頂瑜伽經

金剛歌詠讚 (梵語)

25. 胎藏界念誦次第

九方便 (漢語)

26. 大曼荼羅灌頂儀軌

頌 (漢語)

右に見られる様に、博士の加点はそれぞれの法会に使用された讚・偈(伽陀)・真言の各声明の内、梵語(陀羅尼呪)のものから加点され始め、やがて漢語のものへ広がって行ったことを示している。漢語讚の最も古い7胎藏界次第の博士は新漢音読の例であって、続いて出現する院政期の漢語讚の

例として十八道次第の九方便、その後の五悔も亦新漢音読されたものである。吳音や漢音で読誦された博士加点例は院政期までは一点も見出されない。このことは、博士の加点が先ず梵文(陀羅尼呪)から始まり、新漢音読漢文に広がり、鎌倉時代に入って吳音読・漢音読漢文・和文に広がって行ったことを物語っている。

尚、ここで改めて注意したいのは、これら初期の博士加点が各法会(胎藏界法・金剛界法・十二天法・不動明王法等)の中に収められている声明そのものに為されており、単独の声明として独立したものではないという点である。単独声明として独立し始める例として「十二天儀軌へ一四七」があげられる。この資料では巻末奥書の後ろに「金剛讚」が付載されている。この様な過程を経てやがて単行声明から更に声明集・法則集の加点へと成長することになる。

④節博士は陀羅尼音の忠実な記述法の一部として導入されたと考えられること

天台宗が進取の気性に富んだ学風を有している事は屢々説かれていた。陀羅尼に就いても詳細な研究が行われており、種々の工夫がなされている。清濁の区別や仮名への声点の加点も天台宗僧の考案であつたらしい。本稿で取り上げた資料にも屢々仮名声点が「波ハテ」「薩サル」の様に使用されているが、これも四声点のみでは不分明な調値の明示という所から







発想されたものであろう。博士は、そういう工夫の場で、さらに仮名声点でも不十分な旋律の抑揚と発音の継続時間（長さ）を線分の方向と長さでより正確に表示するために考案されたものと考えられる。要するに、博士は外国語音としての陀羅尼音を正確に表示しようとする工夫の一環であると考えられるのであり、従ってそれは我が国に於ける発明に係るものであったと考えざるを得ないのである。

⑤初期の博士は後世云う「ユリ揺」「ソリ反」「ヨル下」という基本的旋律型の記述から始まったと考えられること

訓点資料の個々の博士の解説は声明研究の専門家に委ねざるを得ないが、試みに初期の博士の旋律型を復元してみるとつぎのようになるかと考える。



⑥節博士は単純なものから複雑なものへと漸次的に発達したものと考えられること

節博士に就き、発達という点から注意されるのは、博士の線の型そのものが「」「」「」「」の様な単純なものから「」「」の様な複雑なものへと変化

していることである。この複雑化が何を物語るのかは分明ではないが、或は声明の旋律そのものが漸次装飾を加えられて複雑化したことを物語るのであらうか。

発達という観点からさらに注意されるのは、元々博士が部分的な加点であったものから全部へ加点される様になった事象である。そういう資料の博士はアクセント記号の性格を帯びて来たことになり、特定の旋律を伴わない場合は「スグ（直）」の博士が考案使用されることになる。

本稿で取り上げた資料の範囲で、そのようなアクセント記号の性格を持つようになっていた最も古いものは胎蔵界・金剛界（法則集）、次いで二十二天法であり、院政時代に入ってからのものである。この頃から、漸次特別の旋律を伴わない部分にも加点が及ぼされ、アクセントそのものも記述すべく、博士がアクセント記号化していったと見られる。

⑦五音博士は古博士・目安博士の後に考案された新しい記譜法であると考えられること

五音博士が既に法円聖人の頃に成立していたとする説がある（多紀道忍・吉田恒三「伽陀音楽論」（『仏教音楽』所収）、片岡義道前引論文）。その資料として上げられるのが大原勝林院蔵の「法円聖人伝秘藏様云々」と注記の有る譜本である。其の影印の指図が『仏教音楽』一七七頁に掲載されている。「これよりも古いとされうるような古博士は私はまだ披

見したことがないのである」(片岡義道氏)というところから立てられた説である。

この法円に就いては確実な生没年が掴めないが、声明血脈譜や天台血脈譜を繋ぎ合わせてその時代を推定してみると、次の様になり、片岡氏の言われる様に十一世紀末頃の僧であることは確かである。

「覚範(二〇九)存在」

皇慶——頼昭(二〇六)存在

院昭——寛誓法円上人弟子 円樂房

「長宴(二〇八)存在」

この様な考え方に対して、(古)博士の具体的な例が十一世紀前半期に既に見出されたのであるから、五音博士よりも古博士の方が古いとしなければならぬ。然も重要な点は、法円と同系の天台宗の同時代の僧が使用していたのは前述の様な古博士であった事である。法円自筆譜が残っていたとしてもそれは「〜」「」の様な簡単な古博士であった可能性が極めて高いのである。この法円聖人伝とする譜は鎌倉時代以後の後人の偽作であると考えられる。五音博士の最古の確例は無動寺藏湛智写「引声阿弥陀経(本奥建曆三年へ一二一三)」。まで下がるのであって、やはり五音博士は古博士・目安博士以後に考案された新しい博士であったと考えるのが妥当であろう。

## 五、本稿の結論

細かな点に就いては今後資料の補充を行なって詰めて行く必要が有るが、本稿の主要な結論は、従来漠然と、声明の渡来と同時に節博士も(中国を経由して)渡来した様に考えられて来たことに對し、博士は日本側で、平安後期初頭に、天台宗僧によって発明されたものであると考えてよろしかろうという事である。「グレゴリオ聖歌」のネウマ式旋律記号は九世紀のものという。我が訓点資料の博士はそれとは直接の系脈無しに発明されたものであって、時期的には彼と若干遅れはするが、洋の西と東で、それぞれに多源的な発生をしたと考えたい。

### 〔注〕

1. 片岡義道氏「天台声明」(『仏教音楽東洋音楽選書』「6」)所収)六九〜七〇頁。
2. 注1に同じ。
3. 多紀道忍・吉田恒三氏「伽陀音楽論」(注1引用書所収)一七六頁、吉田恒三氏「天台声明学概説」(同上書所収)二七七頁、片岡義道氏「声明譜の二系統について」(同上書所収)四八八頁、参照。
4. 片岡義道氏注3引用論文四八七頁。
5. 吉田恒三氏注3引用論文二七七頁。
6. 片岡義道氏注3引用論文四八八頁。

7. 三千院典籍文書調査団（代表奥田勲）編『大原三千院所

蔵の典籍文書の調査研究報告書』（昭和五十九・六

十・六十一年度）による。

8. 「声明資料『聖宝印理趣経』について」（『国語国文』

第3巻2号）。

9. 佐々木勇氏「真福寺蔵『八名普蜜陀羅尼経』鎌倉中期点

録」（『訓点語と訓点資料』第八十二輯）参照。

10. 『京都府古文書等緊急調査報告東寺観智院金剛蔵聖教目

録』（京都府立総合資料館編）による。

1. 『金沢文庫資料全書』第七・八巻による。

2. 東寺の声明については橋本初子氏の概説がある（『東寺

観智院金剛蔵聖教の概要』（京都府立総合資料館編）。

3. 山口佳紀氏「高山寺本古和讃集の研究」（『高山寺典籍

文書の研究』所収）。

4. その奥書は次の如くである。（巻上）「承保四―正月十

日比交了」（巻下）「延久四年六月廿日巳時書了／執

筆者頼尊之」

5. その奥書は次の如くである。（朱書）「點本云此瑜伽者万寿

三年五月廿七日為首於唐院法橋大阿闍梨座下稟受而當初

讀本／其狼藉仍新抄寫備遺忘耳 頼尊記／寛徳二年九月

廿三日點已 此日五更初記／（梵字四十字書）三年十一月 日殿

本對勘注或本是／頼尊記（別筆）「點本云墨者敬一大

阿闍梨授尊敬様也件阿闍梨受良勇和尚耳／頼尊記（云云）」（

以上本奥書）

「天永三年十二月十三日以上件正本書寫移点了／年来傳

受本依狼藉新抄寫也／尊觀記」

（遺書）「長治三年三月廿六日（戊午）奉從常住院始稟之／次日晝

界了抑常住院者天喜二年四月廿四至／廿七日奉從披雲房

稟受之（云云）／同聴一人（公儀供奉） 尊觀記」、

《付記》本稿の主題とする訓点資料の節博士については、平

成元年八月鎌倉時代語研究会（於広島）で「節博士の源流

について」と題する口頭発表、及び「高山寺蔵古博士資料

について」（『平成元年度高山寺典籍文書総合調査報告集』平成二

年三月）という小論を発表している。本稿はその後調査し

得た資料を加えて新たに論じ直し、其の要旨を平成二年五

月度の訓点語学会に於て口頭発表した。発表の際、築島裕

・小林芳規両博士から貴重な御意見を頂いた。

資料の調査に当っては高山寺・石山寺、東寺・随心院御

当局的格別のご芳情を頂戴した。同時に築島裕博士、田中

稔氏、小林芳規博士、花野憲道氏を始めとする各寺調査団

の方々の格別のお世話を頂戴した。記して深謝の意を表す

次第である。

尚、本研究は科学研究費補助金による「平安鎌倉時代語

研究資料の総合的調査研究」（代表者小林芳規）の研究成

果の一部である。

〔ぬもと かつあき、広島大学教授〕

（平成二年六月三十日受理）